

研究ノート

母親が付き添った場合の幼児前期の子どもの採血に対する対処行動の分析

Analysis of Early Infants Behavior During Blood Sampling with Mothers Presence.

平田 美紀¹⁾*, 流郷 千幸¹⁾, 鈴木 美佐¹⁾, 古株 ひろみ²⁾, 松倉 とよみ³⁾

Miki Hirata, Chiyuki Ryugo, Misa Suzuki, Hiromi Kokabu, Toyomi Matsukura

キーワード 採血, 幼児前期, 母親, 付き添い, 対処行動

Key Words blood sampling, early infancy, mother, attendance, coping behavior

抄 録

背景 子どもの権利条約において親からの分離の禁止”が謳われているが、子どもの採血場面では親が付き添う施設は少ない現状である。採血場面に親が付き添い親の助けを受けた子どもは、安心を得ることができ、親の支援を受けながら自分なりの方法で採血に立ち向かうことができる。しかし、これらはほとんどが幼児後期の子どもの対象であり、親の存在の意義が大きい幼児前期の子どもの対象とした研究は少ない。

目的 幼児前期の子どもの採血場面に、母親が付き添った場合の子どもの対処行動を明らかにすることを目的とする。

方法 幼児前期の子どもの、母親が付き添った場合の行動をビデオ撮影し、採血終了後、母親へ半構成的面接を行った。

結果 採血前は【緊張を高める】、【周囲を確認する】、【抵抗する】、【誘導に従う】、【安心を求める】、【覚悟する】の6カテゴリーと10サブカテゴリー、採血中は【緊張の持続】、【苦痛を表現する】、【誘導に従う】、【終了を予測する】、【安心を求める】、【進行を確認する】の6カテゴリーと11サブカテゴリー、採血後は【終了を確認する】、【緊張がとける】、【満足感を得る】の3カテゴリーと7サブカテゴリーが抽出された。

結論 母親が付き添った場合の幼児前期の子どもの対処行動は、採血の経過をイメージすることができないため、母親が主体的に身体的接触を持ち、具体的な対処行動を示すことで見通しを得ることができる。また母親からの賞賛は、子どもの採血に対する緊張感を早期に解くことができる。

Abstract

Background In the “Convention on the Rights of the Child,” it is prohibited to separate the child from his/her parent, but the reality is that there are few facilities where the parent is in attendance when a child’s blood is being sampled. Children whose parents are in attendance and who receive support from their parent are able to feel secure and endure the blood sampling in their own way. However, this usually applies to children in late infancy, and there are few studies regarding early infancy where the parent’s presence is of great significance.

Objective The objective was to clarify the coping behavior of children in early infancy when the mother was in attendance during blood sampling.

Methods We recorded video footage of children in early infancy whose mothers were in attendance during blood sampling and then held semi-structured interviews with the mothers.

Results/Discussion Before blood sampling, 6 categories including [increase in tension], [checking surroundings], [resisting], [following instructions], [desiring security], [being prepared] in addition to 10 subcategories were extracted. During blood sampling, 6 categories including [continued tension], [expressing pain], [following instructions], [anticipating completion], [desiring comfort], [checking progress] in addition to 11 subcategories were extracted. After blood sampling 3 categories including [verifying completion], [relief of tension], [feeling satisfied] in addition to 7 subcategories were extracted.

Conclusions In the coping behavior of children in early infancy whose mother is in attendance, the mother can proactively maintain physical contact and offer the child an outlook by demonstrating specific coping behavior because the child cannot picture the blood sample process. Further, praise from the mother can relieve the child’s tension at an early stage.

I. 緒 言

我が国が子どもの権利条約に批准した1994年以降、小児看護領域では医療処置を受ける子どもの

看護への関心が高まり、近年では病院を受診する子どもの多くが経験する採血に関する報告が増加傾向にある。子どもが受ける採血において認知発達未熟な幼児は、非日常的な採血に対して不安

¹⁾ 聖泉大学看護学部 School of Nursing, Seisen University

²⁾ 滋賀県立大学人間看護学部 School of Human Nursing, The University of Shiga Prefecture

³⁾ 滋賀県立小児保健医療センター Shiga Medical Center for Children

*E-mail : hirata-m@seisen.ac.jp

や恐怖を抱きやすい。このような子どもの苦痛を軽減するために、プレパレーションが推奨され子どもに情報を与えることや、怖い、痛いといった子どもの思いを表現させること、親と分離しないことが重要とされている (Tompson & Stanford (訳, 野村), 2004)。また日本看護協会は「小児看護領域の業務基準」において「小児看護領域で特に留意すべき子どもの権利と必要な看護行為」として“親からの分離の禁止”を挙げている。

しかし医療処置を受ける子どもに対する親の付き添いの実態調査 (鈴木ら, 2007) では、子どもに親が付き添う施設は3割と少ないことが報告されている。採血などの医療処置場面では、親は子どもから離され、子どもの様子がわからないという不安を抱きながらも医療者の指示に従わざるをえない (三島ら, 2004; 藪本, 2006) が、親は子どもの採血への付き添いを希望している (間山ら, 2011)。また、採血を受ける子どもは親に助けを求めており (武田ら, 1997a)、親からの助けを受けることにより安心が得られる (吉田, 鈴木, 2009a; 細野ら, 2009; 三上ら, 2010a; 佐藤ら, 2011) ことがわかっている。非日常的な採血場面では子どもにとって親の存在は大きく、研究者らが採血を受ける幼児後期の子どもと、採血に同席した親を対象に行った調査においても、子どもは親の支援を受けながら自分なりの方法で採血に立ち向かえることが明らかになった (平田ら, 2012a)。子どもは出生後、母親とのやりとりから母子関係を形成し、成長とともに母親から離れていくが、危機的状況下において、幼児後期の子どもは母親を必要とすることより、年齢が低いほど、より親の存在の意義が大きいのではないかと考えた。

そこで、本研究では、2～3歳の幼児前期の子ども (以下子どもとする) に焦点を当て、母親が付き添った場合の、採血場面における子どもの対処行動を明らかにすることを目的とする。

II. 研究方法

用語の定義

幼児前期：子どもの発達段階における区分の中では1歳～2歳までの子どもとされているが、本研究では2～3歳児を対象とする。

採血：アレルギー検査目的で行われる、正中静脈に翼状針を用いた採血

対処行動：子どもが採血を受ける際に示す身体的、心理的な反応および行動

1. 研究対象

A県内の子ども専門病院においてアレルギー外来を受診し、採血を受ける予定の3歳男児1名 (Aちゃん)、女児1名 (Bちゃん)、2歳11カ月女児1名 (Cちゃん) およびその母親を研究対象とした。

2. 調査期間

調査期間は、平成22年10月～平成23年8月までとした。それぞれの対象者の調査日時は3歳女児が平成22年10月、2歳11か月女児が平成22年12月、3歳男児が平成23年8月である。

3. 採血方法

採血を受ける子どもと母親に、処置室へ入室する前に付き添いの希望を確認する。本研究の対象者はすべて付き添いを希望した。処置室には大人用の椅子とサイドテーブルにキャラクターDVDやおもちゃが配置されている。母親は背もたれのある椅子に座り、子どもと向き合うようにして膝に座らせ、子どもの肩の上から腕を回して抱き、子どもは穿刺側の腕を母親の腕の下から採血台に伸ばす。採血の穿刺および介助はそれぞれ看護師が行う。抜針後には、キャラクターが描かれた絆創膏を止血のために貼付する。

4. 調査方法

採血を受ける子どもと母親が処置室に入るところから、採血を受け、退室するまでの場面を、子どもが採血を受ける際に示す行動や表情を詳細に調査し、秒単位で繰り返して分析できるビデオ観察を用いるため、研究者1名がビデオに録画した。採血終了後、母親から子どもへの採血に対する説明、および子どもの過去の採血経験や反応について10分程度の半構成的面接を行った。

5. 倫理的配慮

本研究は明治国際医療大学研究倫理委員会において承認を得た (承認番号2119 平成21年5月承認)。対象となった子どもと母親には研究の目的と方法、研究参加および途中辞退は自由であること、途中辞退による治療上の不利益は被らないこと、個人情報の匿名性および個人が特定できない

ようデータ処理を行うこと、得られた情報は研究以外に使用しないことについて説明し、母親から同意および代諾を得た。

6. 分析方法

録画したビデオを研究者らが独自に作成した記録用紙に子ども、母親、看護師の言動を秒単位で記録し、画像を確認しながら細かな表情の変化を繰り返し確認した。採血場面を入室から穿刺までを<採血前>、穿刺から抜針までを<採血中>、抜針から退室までを<採血後>の3段階に分け、それぞれの子どもの言動をフレーズごとにコード化し、類似性に基づいてサブカテゴリー、カテゴリーに整理しその意味について考察した。データ収集から分析までの過程を小児看護学専門領域の研究者及び臨床経験が10年以上ある看護師とともにに行った。撮影技術と分析精度を高めるため2例の予備調査の分析を行い、分析にあたってはビデオを繰り返し再生し、子どもが採血を受ける際に示す行動やわずかな表情の変化などの意味の解釈に努めた。

Ⅲ. 結果

1. 対象者の背景

対象となった子どもの本調査までの採血経験は、Aちゃん、Bちゃんは4回以上、Cちゃんは初回であった。Cちゃんは泣きながら母親に抱かれて入室し、Aちゃん、Bちゃんは母親について歩いて入室した。入室から退室までの時間は4～6分であった。

2. 採血に母親が付き添う幼児前期の子どもの対処行動

採血に母親が付き添う幼児前期の子どもの対処行動について表1に示す。以下、母親が付き添って採血を受けた幼児前期の子どもの対処行動を、カテゴリーは【 】, サブカテゴリーは『 』で記載する。

1) 採血前の対処行動

採血前は【緊張を高める】、【周囲を確認する】、【抵抗する】、【誘導に従う】、【安心を求める】、【覚悟する】の6カテゴリーと、『緊張感が増す』、『自分の周囲を見回す』、『何をされるか確認する』、『キャラクターDVDを見る』、『言葉や行動で抵抗を表現する』、『母に促されてキャラクターDVDに

目を向ける』、『看護師の誘導に従う』、『母親の誘導に従う』、『母親に身体的接触を求める』、『穿刺を了解する』の10サブカテゴリーが抽出された。

母親とともに歩いて処置室へ入室したA、Bちゃんはゆっくり部屋の中を見回し、担当する看護師や周囲に置かれている採血の物品を見るなど『自分の周囲を見回す』行動がみられた。また、看護師がA、Bちゃんの腕に触れるとすばやく看護師に持たれた腕を見たり、駆血帯が巻かれるのを見るなど、看護師の行動に目を向けていた。一方Cちゃんは「お話だけ?」と繰り返して母親に聞くなど、自分に対して『何をされるか確認する』行動がみられた。また全ての対象者はサイドテーブルに準備された『キャラクターDVDを見る』など【周囲を確認する】様子が見られた。看護師が採血の準備を進めていくと、A、Bちゃんの眉や口元など体に力が入り『緊張感が増す』ことから【緊張を高める】様子がみられた。Bちゃんの母親は椅子に座ると同時に子どもの頭を撫で、過去の採血経験について「痛くなかったね」などと言葉をかけていた。Cちゃんは「いや～」と言いながら大声で泣き、母親を叩くなど『言葉や行動で抵抗を表現する』ことから【抵抗する】行動がみられた。その間、Cちゃんの母親はしっかり子どもを抱き、背中をトントンと叩いていた。それぞれの子どもの母親は、子どもが採血の進行を見る、あるいは大声で泣くと、DVDの方向を向くように言葉をかけ続けたり、手で子どもの顔をDVDの方向に向けようとし、子どもは『母親に促されてキャラクターDVDに目を向ける』様子がみられた。また看護師はすべての子どもに採血の進行を説明しながら準備を進め、子どもは『看護師の誘導に従う』ことや、看護師の促しに対して理解できていない子どもに対して母親が腕を採血台に伸ばし、子どもは『母親の誘導に従う』など【誘導に従う】行動がみられた。さらに「いや～」と表現するCちゃんに対して母親は「いやだよ」「早く終わりたいよ」と言葉をかけながら背中をトントンと叩き、子どもは母親の胸に顔を付けて泣く『母親に身体的接触を求める』など【安心を求める】行動がみられた。穿刺が近づくとCちゃんは「早く～」と言ったり、A、Bちゃんは看護師の「がんばろうな」の言葉かけに頷き『穿刺を了解する』など【覚悟する】行動がみられた。この時母親は、穿刺のタイミングを合わそうと穿刺部位を見ていた。

2) 採血中の対処行動

採血中は【緊張の持続】、【苦痛を表現する】、【誘導に従う】、【終了を予測する】、【安心を求める】、【進行を確認する】の6カテゴリーと、『体に力を入れる』、『視線が定まらない』、『痛みを表現する』、『嫌な気持ちを表現する』、『体を動かさずじっとしている』、『母親の誘導に従う』、『見通しを得る』、『母親に身体的接触を求める』、『母親に助けを求める』、『何をされているか目で確認する』、『進行を確認する』の11サブカテゴリーが抽出された。

穿刺直後はCちゃんはピクッと『体に力を入れる』ことや、Aちゃんは視線をゆっくり動かしたりキョロキョロするなど『視線が定まらない』ことから【緊張が持続する】様子がみられた。A、Bちゃんの母親は、穿刺のタイミングに合わせて抱っこを強めたり、穿刺直後から「お姉ちゃんになったね」と褒め続けていた。Cちゃんは「痛い～」と言い続け、Bちゃんは泣きだし『痛みを表現する』ことや『嫌な気持ちを表現する』など【苦痛を表現する】ことができていた。また、Aちゃんは母親に抱かれて『体を動かさずじっとしている』ことや、A、Bちゃんは母親に促されキャラクターDVDをみて『母親の誘導に従う』など【誘導に従う】ことができていた。泣き続けるCちゃんに看護師が数を唱えるよう促すと、Cちゃんは1から10までの数を唱え始め『見通しを得る』など【終了を予測する】ことができていた。母親も泣いている子どもにわかるように「10唱えたら終わるよ」と説明し主体的に子どもと一緒に数えていた。穿刺が終わるまですべての子どもは母親に抱きつき『母親に身体的接触を求める』ことや、Cちゃんは「おかあさん」と呼び『母親に助けを求める』など【安心を求める】行動がみられた。すべての母親は「あともうちょっと」や「痛くないやろ」などと子どもの顔を見て言葉をかけていた。A、Bちゃんは穿刺部位をじっと見て『何をされるか目で確認する』ことや、Cちゃんは「もう終わった？」と【進行を確認する】ことができていた。

3) 採血後の対処行動

採血後は【終了を確認する】、【緊張がとける】、【満足感を得る】の3カテゴリーと『目で見て終わりを確認する』、『母親から離れる』、『気持ちを発散する』、『安心する』、『採血以外に関心を示す』、『満

足感を得る』、『達成感を得る』の7サブカテゴリーが抽出された。

抜針後は「終わったよ」の言葉を聞くと、すべての子どもは母親の胸から離れて穿刺部位を見る『目で見て終わりを確認する』など【終了を確認する】行動がみられた。また母親は抱っこしていた手を緩めても、背中をトントンと叩くことは続けていた。その後Aちゃんは、母親の膝から降りて『母親から離れる』ことや、Bちゃんは泣くなど『気持ちを発散する』様子がみられた。Cちゃんは「終わった～」と周囲にいる看護師へ伝え『安心する』様子や、またA、CちゃんはキャラクターDVDに集中したり、止血用の絆創膏を選ぶなど『採血以外に関心を示す』ことで【緊張がとける】様子がみられた。母親は抜針直後から子どもの頭を撫でながら、「がんばったね」「えらかったね」と褒めていた。Cちゃんは満面の笑顔になり自分でも「がんばった～」と拍手をして達成感を得ることで【満足感を得る】様子がみられた。

IV. 考 察

1. 採血前における子どもの対処行動

Piaget (1998) は幼児前期の認知発達を「前概念思考段階」と示しているように、物事の概念化ができず自己中心的な思考段階である。したがって自分のイメージから物事を解釈するため不安が生じやすい時期である。子どもは、採血場面という非日常的な環境において【周囲を確認する】ことにより、これから起こることへの心の準備につながっていた。医療処置を受ける子どもが、これから行われることに対して心理的混乱をきたさないためにも、正確な情報を得ることが必要であり(田中, 2008)、子どもが処置室や採血物品を見ることに加え、母親が言葉を添えることは心理的準備につながるといえる。

一方、採血が進行すると子どもは【緊張を高める】または【抵抗する】ことにより、不安や恐怖などの心理的混乱に対して自己を防衛していた。先行研究(武田, 1997b)では、発達段階別による採血前の自己防衛行動は、幼児前期の子どもより、幼児後期の子どもに多くみられており、発達が進むにつれ行動が多様化している。すなわち、幼児前期の子どもは行動が画一的であるため、心理的混乱に対して母親の主体的な支援が必要であ

表1 採血に母親が付き添う幼児前期の子どもの対処行動

	カテゴリー	サブカテゴリー	コード	
採血前	緊張を高める	緊張感が増す	眉をしかめる	
			口元に力が入る	
	周囲を確認する	自分の周囲を見回す	看護師や物品を見る	
			ゆっくり部屋を見回す	
		何をされるか確認する	看護師に持たれた腕を見る	
			駆血帯を巻かれるのを見る	
			採血の準備を見る	
	「お話だけ」と繰り返して聞く			
	キャラクターDVDを見る	自らキャラクターDVDを見続ける		
	抵抗する	言葉や行動で抵抗を表現する	「いや」と言いながら大声で泣く	
			手で母親をたたく	
			手足をバタつかせる	
	誘導に従う	母に促されてキャラクターDVDに目を向ける	母親に顔をDVDの方向に向けられる	
			母親に促されてキャラクターDVDを見る	
		看護師の誘導に従う	看護師に腕を持たれて従う	
母親の誘導に従う		母親に抱っこされたまま椅子に座る		
安心を求める	母親に身体的接触を求める	母親に腕を持って伸ばされる		
		母親の首に手を回す		
		母親の胸に顔をつけて泣く		
覚悟する	穿刺を了解する	母親に背中をトントンされる		
		「早く～」と言い続ける		
採血中	緊張が持続する	体に力を入れる	看護師の「頑張ろうな」の言葉にうなづく	
			視線が定まらない	体にピクッと力が入る
		苦痛を表現する	痛みを表現する	「痛い～」という
	誘導に従う	体を動かさずじっとしている	嫌な気持ちを表現する	泣き出す
			泣きながらじっとしている	
		母親の誘導に従う	母親に抱かれてじっとしている	
	終了を予測する	見通しを得る	母親に促されてキャラクターDVDを見る	
			看護師の誘導で数をかぞえる	
	安心を求める	母親に身体的接触を求める	母親に抱きつく	
		母親に助けを求める	「おかあさん」という	
	進行を確認する	何をされるか目で確認する	穿刺部位をじっと見る	
		進行を確認する	「もう終わった？」と確かめる	
	採血後	終了を確認する	目で見て終わりを確認する	自ら穿刺部位を見る
		緊張がとける	母親から離れる	母親の膝の上から降りる
			気持ちを発散する	泣き続けた後泣き止む
安心する			「終わった～」という	
採血以外に関心を示す			自らキャラクターDVDに集中する	
満足感を得る		満足感を得る	シールを選ぶ	
			母親からの賞賛で笑顔になる	
	達成感を得る	「がんばった～」という		
		自分で拍手をする		

ることが示唆された。

採血前に親から離された場合の子どもは、親を求める行動が多くみられ、処置前から泣き出す子どもが多い(武田, 1998)。しかし、母親が付き添った場合の子どもは、母親のそばにいて、【誘導に従う】行動がとれていた。採血を受ける子どもの対処行動は、母親が採血に付き添う場合、子どもにどのように関わることが大きく影響する(三上ら, 2010b)。本研究では、母親は入室後から子どもの様子を伺い、言葉をかけ、身体に触れるなどに関わっており、主体的な働きかけが子どもの行動へ効果的に影響したといえる。Bowly (1976) は母親と子どもは、身体的接触によって愛着が形成されると述べており、母親からの働きかけが絶えずあることで、子どもは【安心を求める】ことができ、覚悟を決める手助けにつながるなど、母子の相互作用の効果がみられることが示唆された。

2. 採血中における子どもの対処行動

採血中の幼児後期の子どもは、処置に注意を集中させ、恐さを持ちながらもこれから行われる処置に向かおうとする、自己の調整機能が備わっている(吉田ら, 2009b; 吉田, 植木野; 2012)。さらに、先行研究(平田ら, 2012b)でも、家族が付き添った場合の幼児後期の子どもは、穿刺の痛みが過ぎると自ら緊張を解く行動がみられていた。しかし本研究では、穿刺部位を見ようとする子どもに対し、母親が気を紛らわすためにDVDを見るように話しかけても、子どもの視線は定まらず、抜針するまで【緊張が持続する】姿がみられた。すなわち、幼児前期の子どもは、何をされているのか進行を確認しているものの、採血の進行を理解して立ち向かうことや、痛みを伴う場面が経過したことを理解して自ら緊張を緩めるなどの調整ができないことがわかる。したがって、母親自身が穿刺のタイミングを伺いながら、穿刺と同時に子どもを抱く力を強めたことは、自己のコントロールが未熟な子どもの対処行動への支援であったと推察される。子どもは、痛みや苦痛を伴う危機的状況下において、穿刺から抜針まで、助けを求められる母親がそばにいてにより【安心を求める】ことができたといえる。

一方、穿刺部位をじっと見ていた子どもは、途中から突然泣き出し、母親に助けを求める行動が

とれないまま、痛みの体験に直面したと考える。また、採血に対して苦痛を表現していた子どもは、看護師および母親の誘導で数をかぞえるなど、【終了を予測する】ことにつながり、見通しを得る支援の必要性が示唆された。

3. 採血後における子どもの対処行動

子どもは、採血中から緊張が続いていたが、自分の目で穿刺部位を見て【終了を確認】することで【緊張がとける】状態となった。母親が、抜針後も子どもの頭をなで続け、背中をトントンたたき「がんばったね」と繰り返し伝えたことも、緊張を早期に緩和することができたといえる。また、子どもは母親と身体的接触を持っていたが、緊張の緩和と同時に、母親から離れ、採血以外に関心を示すなどの行動がみられ、危機的状況が経過すると、日常の姿に戻ることができると考える。

さらに、母親からの賞賛や、「がんばった～」と思いを表現することで、達成感や満足感を得ることができたと考えられる。採血中から泣き出した子どもは、母親がそばにいてにより、処置室を退室するまでに泣き止み、親の付き添いが無い子どもに比して、早期に泣き止むことができたといえる。

V. 結論

幼児前期の子どもの採血場面に、母親が付き添った場合の子どもの対処行動から以下のことが明らかになった。

1. 採血前は、母親が主体的な関わりと身体的接触を持つことにより子どもの対処行動を支援することができる。
2. 採血中は、子どもは穿刺後の経過がイメージできないため、母親が具体的な対処行動を示すことにより見通しを得ることができる。
3. 採血後は、抜針直後から母親が賞賛し続けることにより、子どもは緊張を解くことができ、満足感・達成感を早期に得ることができる。

VI. 本研究の限界と今後の課題

本研究の幼児前期の子どもを対象年齢は2～3歳であり、対象数も3例であったため結果の一般化には限界がある。今後は、より年齢が低い子

もにとって母親との相互関係が重要であることに焦点をしばり、付き添う母親の支援を検討していく必要がある。

謝 辞

本研究にご協力いただきました対象者の皆様、および対象施設の看護部長はじめ看護師の皆様に感謝致します。

文 献

- J.Bowlby (著), 黒田実郎他 (訳) (1976): 愛着行動, 岩崎学術出版社.
- 平田美紀, 流郷千幸, 古株ひろみ (2012): 家族が付き添った場合の幼児に対する対処行動の観察分析, 聖泉看護学研究, 1, 29-35.
- 細野恵子, 市川正人, 上野美代子 (2009): 小児科外来で採血・点滴を座位で受ける乳幼児に付き添う家族の認識, 日本小児看護学会誌, 18 (3), 52-56.
- 間山明美, 成田直美, 木村桃子他 (2011): 子どもの採血・点滴施行時の家族の立ち会いにおける母親の意識, 小児看護, 34 (6), 796-800
- 三上千佳子, 佐藤幸子, 佐藤志保 (2010): 幼児の採血への対処行動に関連する要因, 北日本看護学会誌, 13 (1), 1-11.
- 三島小百合, 荒木美奈子, 池田京子他 (2004): 小児の採血における母親の立会いとその関連因子についての検討, 日本看護学会論文集, 小児看護, 34, 29-31.

- Richard H.Tompson.& Gene,Stanford. (著), 野村みどり, 堀正, 小林登 (訳) (2004): 病院におけるチャイルドライフ, 子どもの心を支える“遊び”プログラム, 中央法規出版株式会社.
- Piaget,J. (著), 波多野完治 (訳) (1998): 知能の心理学, みすず書房.
- 佐藤志保, 佐藤幸子, 塩飽仁 (2011): 採血を受ける子どもの非効果的対処行動と関連要因の検討, 日本看護研究学会雑誌, 33 (3), 23-31.
- 鈴木恵理子, 小宮山博美, 宮谷恵他 (2007): 小児の侵襲的処置における家族の付き添いの実態調査, 2005年の調査を1995年の調査と比較して, 日本小児看護学会誌, 16 (1), 61-68.
- 武田淳子 (1998): 採血に対する幼児の反応・行動に影響を及ぼす要因, 千葉看護学会誌, 4 (2), 8-14.
- 武田淳子, 松本暁子, 谷洋江他 (1997): 痛みを伴う医療処置に対する幼児の対処行動, 千葉大学看護学部紀要, 53-60.
- 田中恭子 (2008): プレパレーションの5段階について, 小児看護, 31 (5), 542-547.
- 藪本和美 (2006): 患児の点滴・採血処置に対する母親の思い, 日本看護学会論文集, 小児看護, 36, 113-115.
- 吉田美幸, 鈴木敦子 (2009): 検査・処置を受ける幼児後期の子どもが“よい体験”をするために必要なもの, 四日市看護医療大学紀要, 2 (1), 1-15.
- 吉田美幸, 楢木野裕美 (2012): 看護師が捉える点滴・採血を受ける幼児後期の子どもの自己調整機能, 日本小児看護学会誌, 21 (2), 1-8.